

わかば会誌

第10号

2018.9

巻頭言 春の叙勲について

～津幡のクレイマー医～

山崎外科胃腸科医院

山崎 軍治



今年の春の叙勲に際して、旭日双光章の榮に浴する事となり、5月2日に石川県庁に於いて、谷本県知事より勲記と勲章を授与され、5月10日には、皇居の「豊明殿」に於いて、天皇陛下として、春の叙勲最後となるお言葉を賜り、心より感謝して帰ってまいりました。

早速、先輩、友人、後輩、又各方面の方々から多くの御祝意を戴きましたが、河北都市医師会からは、谷内正遠さんの版画「河合谷の風景」をいただき、当院の待合室に飾っており、患者さんも心温まる地元の風景に一樣に懐かしさもあり、会話ははずむ様子で私自身も感激し、大変嬉しく思っております。

また7月22日には、発起人の方々（由雄先生・紺谷先生・北谷先生・沖野先生・最上さん）のご尽力により祝賀会を開催し、多くの先生方にご参加いただき、盛会のうちに終える事が出来たことを深く感謝申し上げます。

さて、私のこれまでの人生を振り返りますと、満州国新京市で生まれ、敗戦と同時に両親は苦勞の末引き揚げ、故郷の津幡町に居を構え、父は石川県庁に、母は津幡保健所の医師として働き始めたため、幼い頃は母の実家である北村医院で育ちました。小中学校時代は、近所の友達と近くの自然の中でよく遊びました。高校は、金沢泉丘高校に入学し、汽車とバスで通学していましたが、当時の汽車は気動車かSLであり、通学に約1時間を要し、冬はいつも遅刻ばかりでしたが、高校の先生方は、大変な通学事情を察し、やっと学校に来てくれたと言わんばかりに優しく迎えて貰ったおかげで、気も休まり、勉強に集中出来たように思います。楽しくもあり、悩み多い3年間を経験し、三八豪雪の4月に金沢大学に入学後、医学部バレー部に入学し、それなりに頑張りましたが予選敗退が多く、西医体後の旅行が楽しみな部でしたが、2年先輩に故・上林先生や故・木下先生がおられ、とても可愛がって貰ったこともあり、第二外科の先生は、皆優しいという先輩の言葉を信じ、何の違和感もなく第2外科に入局しました。最初のオーペンは板東先生、故中川原先生であり、お二人共大変優しく指導して下さい、大声で叱られることも無く、また出張の先生方も優しい先生方ばかりで、主治医制をしていただき、若輩の我々にもメスを持たせ、数々の手術を教えていただいたおかげか、卒業後、7～9年もすると一人前の外科医

になったように錯覚し、クレバーな外科医を育てるべき研修システムの中で、どういう訳か自分が徐々にクレイマーな外科医になりつつあると思っていました。

昭和五十八年に津幡町で開業すると、郡医師会には、元谷先生・政岡先生、県医師会には、倉西先生・矢崎先生がおられ、色々と保険診療等を丁寧に御指導いただき、さらに自信をつけ、クレイマーの体質が徐々に顕著となり、金沢医科大学病院・河北中央病院・JCHO金沢病院・浅の川総合病院さんには、色々と迷惑を掛けていましたが最近では、各病院に地域連携室がつくられ、優秀なナースや職員が配置され、クレイムを上手く処理していただき、津幡のクレイマーも最近では徐々に老化が目立つクレイマーとなっております。一方、医師会活動では、郡医師会の理事を始めとして、医師会と医師国保の役員を20年近く経験し、自分が一番力を入れていたのは、健診とがん検診であります。一般健診に関しては、平成20年に特定健診が始まってからは、医師国保の健診の中心的存在となり、各郡市の委員の先生とタイアップし、受診率56～58%を維持し、全国トップクラスの受診率を維持しております。次に、津幡町の胃がん検診は平成4年より、胃レントゲン検診の施設検診を始めましたが当初は、毎年数例の胃癌を発見していましたが、精度管理は大変であり、平成28年度で中止とし、平成26年より開始した胃内視鏡検診が施設検診となり現在に至っています。金沢医科大学伊藤教授・北方准教授をレフリーに、河北中央病院寺崎院長を世話役になって戴き、町内3医療機関と少ない施設の中でも毎年2～3名の早期癌が発見され、徐々に精度の高い検診となっていると考えております。他方津幡町の肺がんの検診では、石川県立中央病院の小林先生をレフリーに太田先生に世話役になって戴き、平成12年に開始し、現在まで継続しており、毎年1～2名の肺癌が発見され、小林先生の御指導の賜物でもあると思っておりますが、読影医のレベルも年々上がっており、精度の高い肺がん検診となっていると思っております。

色々と書き留めましたが、自分は、最近知力の低下を感じるものの、体力はまだ続きそうなので微力ながら、一般診療・健診・がん検診に努力致したいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

山崎 軍治 先生の叙勲祝賀会によせて

発起人代表

河北郡市医師会 会長 由雄 裕之



壇上の山崎先生御夫妻と祝辞を述べる由雄会長

7月22日、山崎先生の旭日双光章の受章を祝う会を企画しましたところ、医師会関係のみならず、谷本県知事、矢田町長をはじめとする行政の先生方、金沢医科大学、金沢大学の先生方、警察および地元津幡町の方々など、二百人を越える方々の参加をいただきました。まことにありがとうございます。

山崎先生は金沢泉丘高校、金沢大学医学部を優秀な成績でご卒業され、昭和44年、金沢大学医学部第2外科に入局されました。関連病院でご研鑽ののち、昭和58年、地元津幡町にて外科胃腸科医院を開業されました。平成10年から6年間、河北郡市医師会会長を勤められました。

会長職在職中はその高い学識やエネルギッシュな行動力で、当地区の医療に大きく貢献されました。さらに、県医師会代議員、県医師国保組合理事、津幡警察署嘱託医などのご要職にも就かれました。津幡町の検診事業でも、肺がん検診や胃カメラによる胃がん検診を確立されました。

今回それらのご功績が認められ受章されたことは、医師会にとっても、また津幡町民にとっても大変誇らしく喜ばしいことと思います。山崎先生は会長職を辞された後も、我々会員をやさしく、時に厳しく、時にさらに厳しく導いてくださっています。そのエネルギーはいささかも衰えておりません。感謝しております。

祝賀会は、山崎先生の高校時代の同級生で、

宝生流能楽師の藪俊彦氏より仕舞「高砂」がまずご披露され、おごそかに格調高く始まりました。谷本県知事、矢田津幡町町長、安田石川県医師会会長、高島金沢医科大学理事長よりご祝辞をいただきました。また山崎先生のご功績にまつわるさまざまなエピソードを、吉田津幡警察署警察官友の会会長、富田金沢先進医学センター理事長、三嶋金沢工業大学名誉教授、岡本小児科医院院長の方々からご披露いただきました。当会からの記念品として版画家谷内正遠氏の作品が、北谷先生より送られました。中締めは沖野副会長がユーモアたっぷりに行われ、3時間あまりの会がなごやかに終了しました。

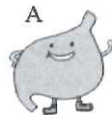
山崎先生が今後もますますお元気でご活躍されることを祈念して、ご報告とさせていただきます。



山崎先生御夫妻と発起人の方々

ABC検診の注意点や問題点

なかお医院 中尾 武



「ABC検診」は胃がんリスクを層別化しようとする検査です。その有効性を検証する研究も進行中ですが、その問題点も徐々に明らかになって来ています。平成24年6月の(財)日本対がん協会報は「A群でもがんが見つかるという報告もあり、A群の中に本当は感染している人と、本当に感染していない人が混在している。」と指摘し、平成25年4月に日本消化器がん検診学会は「ABC検診を従来のX線検査に代わるものとして導入する考え方を看過できない大きな問題と警戒する。」との声明を発表しました。私が開業しているかほく市は、平成25年度に胃がん検診としての胃部エックス線検査に替えてABC検診を導入しました。

1. ABC検診だけで胃がんリスクを有しない人を選別することはむずかしい。

ピロリ菌抗体検査は、現時点で除菌が必要かどうか(現感染)を判断するためにカットオフ値が定められました。将来的に胃がんになりやすさ(既感染)を判断するための検査ではありませんでした。平成27年6月に日本ヘリコバクター学会から「(1)血清ピロリ菌抗体検査には、一定の偽陰性、偽陽性があります。(2)血清ピロリ菌抗体検査結果で、カットオフ値未満(陰性)で低値ではない場合、現在や過去の感染例が相当数含まれるので、胃がんリスクがないと判定しないで下さい。」などの注意喚起が発表されました。また、ピロリ菌抗体価が3U/mL以上かつ10U/mL未満(陰性高値)の868例で、現感染者が9.3%、既感染者が76.7%、さらに3U/mL未満の2985例でも、現感染者が0.8%、既感染者が21.6%いるとの報告が相次ぎました。これらを受けて、日本消化器がん検診学会等の前述の声明に反論していた認定NPO法人日本胃がん予知・診断・治療研究会は、平成28年度からピロリ菌抗体検査について、3U/mL以上かつ10U/mL未満(陰性高値)の人を「B群」あるいは「C群」と判定するように基準の見直しを提案しました。しかし、ピロリ菌抗体価が3U/mL未満に限定された「(新)A群」にも胃がんリスクを有する人が5人に1人以上含まれます。

また、ペプシノーゲン(PG)検査陰性群には、PG1あるいはPG1/PG2のいずれかが低値を示す高危険群が混在し、ペプシノーゲン検査陰性群は必ずしも低危険群とは限らないとされています。ABC検診の提唱者で、かほく市にも講演に来られた井上和彦先生でさえ「100%の検査は存在しません。」と、ABC分類の限界を指摘しています。

さらに、ABC検診を2回受ける意義はないとされています。例えば、1回目の検査でピロリ菌抗体価が6U/mLであった人が、数年後の検査で3U/mL未満になった場合でも胃がんリスクが減少したと判断することはできません。

2. (新)A群と判定された人も定期的な胃内視鏡検査や胃部エックス線検査を受けることが必要です。

(新)A群については、胃内視鏡検査や胃部エックス線検査によりピロリ菌の現感染および既感染が否定されたならば、ピロリ菌の現感染も既感染もない「真のA群」として任意型検診で検査を受けてもらうことにも妥当性があるとする意見があります。しかし、胃内視鏡検査結果のダブルチェックなどの精度管理がなされておらず、ピロリ菌の既感染を否定できる精度の高い胃内視鏡検査で補完されているとは言えない状況では、相当の胃がんリスクを有する集団を対策型検診の対象から除外することは適切ではありません。さらに、

ピロリ菌が関与しない悪性腫瘍を診断するためにも、定期的に検査を受けることが必要です。

3. 医療費削減効果を期待できないかもしれません。

ABC検診により医療費を4年間で2億円削減したという報告がありますが、これは胃内視鏡検査の精度管理をしっかりした大規模な自治体での報告です。この精度管理という大前提がない現状では、胃内視鏡検査受診者数は増えて内視鏡実施医療機関への支出が増える一方で、不要な検査やそれに伴う偶発症、および病変の見逃しが増加して医療費削減効果は期待できないことが予測されます。(新潟市での研究では、診療所の医師の胃がん見逃し率は23.3%でしたが、新潟大学の内視鏡指導医によるダブルチェックを義務づけたところ、8年間で6.8%に減少しました。)さらに、除菌後の内視鏡検査受診率を向上させようとして内視鏡検査受診者に助成金を出している自治体がありますが、ピロリ菌除菌後の胃内視鏡検査に対する助成制度などの創設は、定期的な精密検査が必要になった場合でも助成制度がない肺がん、大腸がん、前立腺がん、子宮がん、乳がんなど他のがん検診との整合性が欠くだけでなく、公的資金の更なる支出となります。

4. 適切な情報提供が必要です。

市町村のがん検診は、厚生労働省通知である「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」に基づいて実施されています。この指針では、「胃がん検診の検査項目は、胃部エックス線検査又は胃内視鏡検査のいずれかとする。」と明記されています。ABC検診は、現状ではエビデンスが確立されていない方法です。また、胃がんリスクありと判定された人でも大半はがんを発症しません。従って、胃がんが発症するという誤ったレッテルを相当数の人で生涯に亘って貼られてしまうことになります。乳がん検診では偽陽性に伴う心理的負担が報告されており、ABC検診でも危惧されています。ABC検診が試行として実施されている検査であること、偽陰性や偽陽性のこと、ABC検診自体の限界や不利益などについてしっかりと周知を行うことが必要です。

また、ABC検診導入当初は、A群と判定された受診者に「通常胃カメラは不要です。症状があればかかりつけ医に相談しましょう。」「ピロリ菌の感染はなく、胃粘膜の萎縮もありません。」と報告書に記載して渡していました。しかし、当時のA群の人は胃がんリスクを有し、胃内視鏡検査や胃部エックス線検査が必要であることに異論はありません。症状が出てから胃がんが発見された場合、根治不能な症例が多くなります。ABC検診にかかわる主治医や自治体担当者は、ABC検診導入初期にA群と判定された受診者全員に、説明が不適切であったことを早急に伝えて適切な対応を指導することが必要です。

(平成29年11月寄稿)

追記：胃がん発見のためには、県内では従来の胃部エックス線検査の他、内視鏡検診が導入されている市町(河北郡市では津幡町)もあることはご存じのとおりです。かほく市では市内の医療機関の実情に合わせ、血液検査で胃がんになりやすい方を抽出するABC胃がんリスク検診を導入しております。引き続き精度向上のための検討を進めてまいります。(かほく市検診委員会)

ごあいさつ

いしざき皮膚科クリニック
石崎 康子

2017年5月にかほく市内日角にいしざき皮膚科クリニックを開院し、1年が経ちました。新規開業で勝手のわからないことばかりでばたばたしておりましたが、なんとか乗り切れたのはたくさんの方のご協力のおかげと感謝の日々です。

私は石川県金沢市の生まれで、父は金沢医科大学皮膚科前主任教授の石崎宏です。秋田大学を卒業後、秋田大学皮膚科に入局、専門医、学位を取得し、父の退官と入れ替えで故郷に戻り、金沢医科大学皮膚科に入局しました。その後は金沢医大病院や七尾の恵寿総合病院等に勤務しておりました。

20年勤務医をしておりましたが、秋田県も能登地方も高齢化が著しく、総合病院の皮膚科は患者さんの年齢がかなり高かったので、開業して驚いたことの一つは小児の患者さんが非常に多いことです。近年、食物アレルギーの獲得において湿疹病変での経皮感作が注目されており、乳児期からのスキンケア、乳児湿疹の治療が様々なアレルギー性疾患の予防になると考えられています。

アトピーマーチへの一步を食い止められるよう、外用剤の使用方法、スキンケア方法、治療の意義も含め、ご家族にしっかり説明するようにしています。外用剤



新会員紹介



は適切な治療薬を選択しても、適切に使用できないと効果がなかなか出なかったり、副作用がでたりしますので、適切な外用方法の指導を行うとともに、入浴や洗顔、メイクなども皮疹を悪化させる要因になるため生活指導にも力をいれています。

病院勤務くらべてクリニック内ではどうしても行動範囲がせまく、運動不足解消もかねてガーデニング、といえるほどでもないのですが、クリニックの内外で植物をいろいろ育てています。あまり計画性なくあれこれ植えてみるので、枯れたり、逆に大きくなりすぎて収拾がつかなくなったりするのですが、花が咲いたり実がなるととてもうれしく、とてもよい気分転換になります。開院祝いにいただいた胡蝶蘭を植え替えたのも、1年たって、開花しました。ちょっと自慢なのでみてください。

河北都市医師会の先生方には医師会暖かく迎え入れていただき、患者さんのご紹介のみならず、いろいろなアドバイスをいただいたり、とてもありがたい、心強く思っております。すこしでもお返しできるよう、地域に貢献できるクリニックにしていこうがんばりますのでよろしくお願いいたします。

編集後記

今年の夏の暑さは半端なものでした。会員の先生方の施設にも脱水や熱中症の方が多く受診された事と思います。天候が激烈さを増している昨今ですが、これからはどうでしょうか。今回のわかば会誌は予定よりもかなり遅れての発行になりました。早々に原稿を載っていた先生方にはお詫び申し上げます。会員の諸先生方にはこれからも御寄稿などの御協力をお願い致します。

会誌編集委員

石倉 直敬
紺井 一郎
沖野 惣一
北 勝利
河村 公二
金原 拓郎

